

同語反復文の意味はどのように解釈されるか (II)

—— 日本語の場合を中心にした考察¹⁾ ——

北海道大学 阿部 純一

北海道大学 佐山 公一

I. はじめに

本稿は、(I)、(II)の2部からなる研究の後半(II)である。本稿(II)では、主として、名詞述語文形式をもつ日本語同語反復文(nominal tautology)がどのように解釈されるかについて考察する。

本研究で扱う名詞述語文形式の同語反復文とは、日本語においては(1)の形式、英語においては(2)の形式、をとるものをいう。

(1) AはAである (または, AはAだ) . (A: 名詞)

(2) (ART) A be (ART) A. (A: 名詞, ART: 定冠詞, 不定冠詞, または無冠詞)

このような文形式をもつ同語反復表現は、様々な言語においてよく見られる。たとえば、日本語においては(3)のような表現を、また、英語においては(4)のような表現を、日常生活の中でよく聞く(見る)ところであろう。

(3) (しよせん,) 子供は子供だ。

¹⁾ On the interpretation of nominal tautology (II): The case of Japanese.

Jun-ichi Abe and Kohichi Sayama

(email: abe@hubs.hokudai.ac.jp) (email: sayama@hubs.hokudai.ac.jp)

Department of Behavioral Science, Faculty of Letters, Hokkaido University

本研究は、平成5年度文部省科学研究費(重点領域研究「音声対話」(計画班B), 課題番号 05241102)の補助を受けた。

(4) Business is business.

本稿の以下では、“同語反復文”とは(1)または(2)の形式をもつ同語反復文を指すものとする。また、日本語および英語の同語反復文中で繰り返される名詞Aを“反復語”と呼ぶことにする。

本研究の前半部(Ⅰ)においては、(2)の形式をもつ英語同語反復文の意味解釈を扱った従来の研究を展望し、問題を整理した。

本稿(Ⅱ)では、まず次節において、日本語の同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を概観する。続いて、第3、第4節において、我々(佐山・阿部)がこれまで行ってきた考察をまとめて紹介する。第5節では、日本語と英語の同語反復文の比較を行う。特に、日本語に関する我々の説明と英語に関するWierzbicka(1987)の説明について具体的に比較する。第6節は、同語反復文が伝える意味の普遍性について考察する。第7節は、まとめである。

2. 日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

日本語の同語反復文がどのように解釈されるかという議論は、もっぱら言語学において行われてきた。ただし、そこでの議論は、同語反復文を；他の種類の同語反復表現（たとえば、同一の名詞²⁾、動詞、形容詞、形容動詞を繰り返す表現）と一緒に扱っていたり、あるいは、名詞述語文一般の議論の中で言及したりしていることが多く、同語反復文そのものを詳しく考察しているものは少ない。また、そのためか、残念ながら、ほとんどの研究が浅い説明に終わっている。

大野(1978)は、同語反復表現一般について触れており、それらは、未知情報を含まない

²⁾ 英語には妥当な例が見つからないが、日本語には名詞を反復する以下のような同語反復表現もある。Aはいずれも名詞である。

- (i) a. AがAだけに、(文)
b. 問題が問題だけに、どう対処したら良いか分からない。
- (ii) a. AはAで、(文)
b. 太郎は太郎で、別の考えもあろう。
- (iii) a. AもAだ。
b. (そんなひどい言い方をするなんて、) 太郎も太郎だ。

ため、情報を伝達する機能を果たさず、主語によって示される“題目”について確認する機能のみをもつ、としている。そして、例の一つとして同語反復文(5)を挙げ、その意味は「バカはやっぱりバカで、それ以外ではない」というようなものになるとしている。

(5) バカはバカだ。

しかし、彼の議論では、同語反復文と他の種類の同語反復表現とを区別しておらず、また、それゆえ当然のことではあるがそれぞれの意味解釈の詳細にまでは触れていない。

毛利(1980)は、同語反復文の解釈の過程を以下のように説明している。聴者は、同語反復文が、話者によって想定されるすべての可能世界(possible world)³⁾において真となるため、“会話の公準(conversational maxims)”(Grice, 1975, 1978)の下位原則である“量の公準(maxim of quality)”に違反していることを容易に判断できる。そして、その判断をきっかけにして、文脈や発話状況ごとに“善意の解釈”を行う。たとえば、(6) ((3)に同じ)に対しては、「子供というのは子供だけあって幼稚なものだ。仕方がないものさ」というように解釈する。

(6) 子供は子供だ。

彼の説明は、たとえば、英語同語反復文の意味解釈に対するBrown and Levinson(1978)の考察や(I)で紹介したLevinson(1983)の説明、あるいは日本語同語反復文の意味解釈に対する金子・佐山・阿部(1986)の考察、などと軌を一にしているといえる。

小泉(1990)も、毛利(1980)と同様に、Griceの会話の公準を基本にした同語反復文の意味解釈の説明を行っている。また、(I)で紹介したLevinson(1983)と同じく、同語反復文は“ $\forall x (W(x) \rightarrow W(x))$ ”という論理形式を自然言語によって表現したものと仮定している。彼の説明によれば、同語反復文の解釈は次のようになされることになる。同語反復文は会話の公準の中の量の公準に違反する。話者と聴者の間では、同語反復文の主語AがB₁, B₂, B₃・・・といった属性を有することが了解済みになっている。聴者は「AはAである」に対し、「Aは(Bであるから、Bであるものは)Aである」というように、省略を補う推論を行い、AにBという属性のあることを再認識する。たとえば、同語反復文(6)に対しては、「子供」の“無邪気”，“聞き分けがない”，“わがまま”，等々の属性が話者と聴者の間で

³⁾ 一般に、話者は、その場の文脈あるいは発話状況下において自らの心内に可能世界を想定し、その中の少なくとも一つと矛盾しない発話を行う(Abe, 1982; Fauconnier, 1985; Johnson-Laird, 1983).

認識されており、聴者は「子供は（無邪気だから、無邪気なものは）子供だ」というように省略を補う推論を行い、その意味するところを解釈する。

確かに、小泉の言うように、同語反復文によって聴者に与えられる情報は、実質的には反復語に負うところが大きい。また、聴者が同語反復文の意味を解釈する際に、反復語から想起される属性を直接的にあるいは間接的に利用しているということも疑いの余地がない。しかしながら、そうであるならば、より具体的に、どのような状況・文脈の下でどのような属性がどのように選ばれるのか、についての説明が望まれるところではある。

国広(1985)は、聴者は一種の慣用的“枠組”を適用することによって同語反復表現を解釈すると指摘する。彼の言う枠組とは、繰り返される単語を変項としてとる一定の表現形式をもち、かつ、その表現形式が慣用的にある種の意味のパターンをもつもの、を指している。

(7) 安いことは安い。

(8) 言うことは言う。

たとえば、彼は、(7)、(8)のような「AことはA (Aは形容詞または動詞)」という枠組にあてはまる同語反復表現は、「一応、Aと言える」という意味のパターンに従って解釈されると説明している。ただし、彼は同語反復文に関しては何も述べていない。

3. 我々(佐山・阿部)の研究

近年、我々(阿部, 1989a, 1989b; 佐山・阿部, 1988a, 1988b, 1991a, 1991b, 印刷中)は、同語反復文の解釈過程を体系的に説明しようと試みている。我々は、ここで、日本語の同語反復文が解釈される際に働いているであろう“制約”について、提案してみたいと思う。

ここでいう制約とは、日本語を母語とする聴者が同語反復文を解釈する際に適用する一種の“知識”あるいは“規則”を意味するものであり、それはまた、聴者が同語反復文を解釈する際に適用する“スキーマ”の諸性質と言いかえてもよいかもしれない。

以下に、その“制約”を列挙していく。

[A] 反復語の指示する概念が強い“価値評価”を伴う場合、同語反復文を、その概念の価値評価が恒常的で不変であることを強調・再認識する意味に解釈する(ことを試みる)。

この制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては、(9) (例文(5)と同じ) や(10)などが挙げられるであろう。

(9) バカはバカだ。

(10) ダイヤはダイヤである。

一般的に言って、「バカ」や「ダイヤ」という概念には、肯定的にせよ否定的にせよ、強い価値評価が伴う。そのような、強い価値評価を伴う概念を指示する名詞を反復語とする同語反復文は、その意味するところを理解しやすく、また実際よく発話される。日本語において慣用句として定着している(11)なども、元来は、この種の制約の下にあったものと考えられる。

(11) (腐っても、) 鯛は鯛だ。

では、(12)や(13)の場合はどうであろうか？

(12) ? 空は空である。

(13) ? 鱒は鱒だ。

我々の文化においては、一般に、「空」や「鱒」に、「ダイヤ」や「バカ」や「鯛」ほどの強い（正あるいは負の）社会的価値を与えてはいない。したがって、文脈から単離された形で(12)や(13)の同語反復文を与えられた場合、聴者は、制約[A]の下でその意味を解釈することはできず、（また、後述するような他の制約を利用して解釈することもできないため）、結局どのように解釈してよいか迷うことになる。

同様なことは、同語反復文(11)を他の言語に直訳した場合にも言えるかもしれない。もしもその文化が日本とは異なり、「鯛」を価値ある魚としていなかった場合、その直訳された文の意味（特に隠喩的な意味）はほとんど伝わらないことになるであろう。

ところで、[A]に言う“価値評価”は、その概念から標準的にまた恒常的に連想されるもの（たとえば、ダイヤであれば金銭的価値）である必要はない。話者・聴者間の特別な可能世界の中で付与された一時的なものであってもよい。同じ同語反復文でも、その同語反復文の置かれた文脈・状況次第で話者・聴者間で想定される可能世界が変わり、そこで了

解される価値評価も変化することは十分にあり得る。たとえば、(14a)と(14b)とを比べてみてほしい。

- (14) a. いくら小さくても、ダイヤはダイヤだ。十分に価値がある。
b. いくら高価だといっても、ダイヤはダイヤだ。命にはかえられない。

聴者は、(14a)の文脈下で想定される可能世界の中で、「ダイヤ」の金銭的価値が話題とされていることを了解し、「ダイヤはダイヤだ」を、そうしたダイヤの高い価値に言及したものとして解釈することであろう。これに対し、(14b)の文脈下で想定される可能世界では、「ダイヤ」の“もの”であることが話題となっていることを了解し、「命」との比較においてダイヤの価値が低いことが確認・強調されている発話として解釈するはずである。

- [B] 反復語Aが指示する概念が強い“独自性”をもつ場合、あるいは／かつ、陰に陽に「BはB, AはAである。(A, B: 名詞)」という対比的な情報呈示をとる場合、同語反復文「AはAである」を、Aの概念の独自性を強調・再認識する意味に解釈する(ことを試みる)。

[B]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては、(15)、(16)などが挙げられると思う。

- (15) (アメリカはアメリカ,) 日本は日本である。

- (16) (君は君,) 太郎は太郎だ。

[B]に言う“独自性”は、その概念が恒常的に有すると認知されるものである必要はない。対比的な表現がとられると、修飾節の同語反復文「BはB,」が文脈となって主節の同語反復文と対照させられ、主節の反復語Aの指示する概念の、修飾節の反復語Bの指示する概念に対する相違点を話題とする可能世界が想定される。その結果、聴者は、その相違点に基づいてAの一時的な独自性を認めることになる。

- (17) a. ? 心理学は心理学だ。
b. 生理学は生理学, 心理学は心理学だ。

たとえば、文(17a)のように文脈から単離されている場合、[A]や[B]の制約が働きにくく、

このままではその発話の意図が推測しにくい。しかし、(17b)のように、対比するに足る対象が具体的に示されると、その違いを話題とする可能世界を想定することができ、その意味が容易に解釈できるようになる。

ただし、そうした可能世界は、ただ単に二つの名詞A, Bを並べただけでは想定できない。そうした可能世界は、聴者がAとBとの間に共通の意味的基盤を見つけやすいほど容易に想定できる。すなわち、AとBとが同じカテゴリー・レベルにあり、共有する意味的属性が多ければ多いほど、その対比は理解されやすくなる。例文(18)のa, b, cを比べてみてほしい。

- (18) a. ? 鳥は鳥, 心理学は心理学だ。
b. ? 認知心理学は認知心理学, 心理学は心理学だ。
c. 心理言語学は心理言語学, 言語心理学は言語心理学だ。

さて、以下に記す[C], [D]は、日本語に特有な制約と考えられる。

[C] 「aだって (あるいは, aも, など), AはAである」の文形式をとり、かつ、aが反復語Aの下位事例、とくに典型的でない事例を表わす名詞である場合、その同語反復文を“aが実際にはAの下位事例である”ことを強調・再認識する発話として解釈する (ことを試みる)。

[C]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては、(19), (20)を挙げるができると思う。

(19) ペンギンだって, 鳥は鳥だ。

(20) みかん箱だって, 机は机だ。

[C]の同語反復文中の事例aは、カテゴリーAの事例として受け入れられるものでなければならぬが、“典型的(typical, prototypical)” (たとえば, Rosch, 1973; Rosch & Mervis, 1975) なものであってはならない。次の(21a) ((19a)に同じ) と(21b)を比較してもらいたい。

- (21) a. ペンギンだって, 鳥は鳥である。
b. ? すずめだって, 鳥は鳥である。

(21a)は容認しやすいが、(21b)は容認しにくい。この両者の違いは、ペンギンの鳥としての典型性とすずめの鳥としての典型性の差に起因する。つまり、(21a)のようにaがAの典型的でない事例の場合は受け入れやすいが、(21b)のように典型的な事例である場合は、それなりの状況・文脈がない限り、受け入れにくい表現となる。

[D] 反復語が、話者の感情や情動的な状態を表し、かつ、形容動詞の語幹とみなし得る名詞である場合、その同語反復文を話者が話者の感情・情動状態を確認している発話として解釈する（ことを試みる）。

[D]の制約の下で解釈され得る同語反復文の例としては、(22)、(23)などが挙げられると思う。(24)の反復語「安堵」は、「安心」と似た意味をもっているが、形容動詞の語幹とはなり得ないので、それをもつ同語反復文(24)は、一般的には、容認できない。

(22) 楽は楽だ。

(23) 安心は安心である。

(24) ? 安堵は安堵である。

4. “制約”と意味解釈

聴者は、同語反復文を解釈する際に様々な知識を利用する。発話状況に関する知識、当該の同語反復文の前後にある文脈に関する知識、反復語およびその指示する概念に関する知識、そして、上記の制約の中でも触れている、個々の同語反復文が埋め込まれる慣用的表現パターンに関する知識、等々である。そうした各種の知識を利用する上での条件を述べたものが、Wierzbicka(1987)の“下位構文”（前稿(I)を参照してほしい）であり、本稿で我々の言う“制約（の条件部分）”であるといってもよいであろう。

いずれかの“下位構文”あるいは“制約条件”にあてはまれば、同語反復文の意味処理は進むことになる。もしいずれにもあてはまらなければ、そしてその他の手がかりがなければ、その同語反復文の意味は結局は捉えられないことになる。

同語反復文の中には、その意味（あるいはその発話の意図）を解釈しやすいものもあるが、そうでないものもある。このことは、前稿(I)においてもあるいは本稿においても既に述べた。我々の考えに従えば、“制約”を適用できるあるいは適用しやすい同語反復文ほど理解しやすい同語反復文になる、ということになる。逆に言えば、ある種の同語反復

文が他より解釈しやすい理由は、聴者がそれらの同語反復文に対しては（“制約”と呼ばれる）ある種の知識を適用することができ、文字通りの意味を超えた意味を算定することができるから、ということになるわけである。

基本的に、同語反復文が伝える意味は、隠喩文と同様、主語および述語（名詞）がもつ何らかの属性情報ということができる。隠喩文「AはBである」を解釈し受け取ることのできる属性情報は、Bのもつ属性のうちのある特定部分に限定される、つまり、Bから自由に連想される属性よりも絞られたものとなる(Searle, 1979)。同様に、同語反復文を解釈し受け取ることのできる属性の種類は、“制約”、“下位構文”などといった一定の条件によって限定される。同語反復文と隠喩文の伝える属性情報は、ともに、述語が本来もつ属性情報のうちのある特定部分に限定されるとしても、その両者の限定の程度には多少の違いがあると考えられる。隠喩文の場合は、同じ述語Bが使われたとしても、主語Aが異なると、Bから受け取り得る属性情報が異なってくる。他方、同語反復文の場合には、我々や Wierzbicka(1987)が指摘するような“価値評価”、“義務”、“寛容”などといった特定の性質をもつ属性情報に固定されている。その意味で、同語反復文の方が、隠喩文に比べて、伝えられる属性情報の限定の度合いがより大きくまた固定的であると考えられる。しかし、一方で、それがために、その伝える“効果”がより大きくなるのかもしれない。(25)の隠喩文と同語反復文を比較してみてもらいたい。

- (25) a. (しよせん,) 太郎はガキだ。
b. (しよせん,) ガキはガキだ。

「太郎」の子供じみた行動が話題となっている文脈・発話状況下で、この(25a)と(25b)のいずれかを言われたとしてみよう。「幼稚な」、「手に負えない」といった「ガキ」の属性、特にそれが有する否定的な価値評価は、(25b)の方が、(25a)よりも効果的に聴者に伝えるのではないかと思う。

ところで、上に提案した制約のほとんどは、互いに他を強く排他するというような性格をもっていない。ということは、同じ同語反復文に対する解釈が同時に異なった制約の下で重疊的にあるいは多義的になされることがあり得る、ということを示唆している。例文(26)を見てほしい。

- (26) a. ダイヤはダイヤである。
b. サファイアはサファイア、ダイヤはダイヤだ。
c. イミテーションだって、ダイヤはダイヤである。

聴者は、(26)の各文を、[A]、[B]、[C]の制約下で解釈しようと試みる。その際、[A]、[B]、[C]の適用は必ずしも互いに排他的に働かない。たとえば、(26c)の意味が、「たとえイミテーションのダイヤであっても、ダイヤには違いなく、十分に美しい」とでも表現できるようなニュアンスで受け取られるとしてみよう。その場合、その解釈には、[C]ばかりではなく、[A]も関与していることになる。

ただ、[D]が適用される場合に関しては、[A]、[B]、[C]との間に適用の重畳性はないと考えられる。たとえば、例文(27)を見てほしい。

- (27) a. 不安は不安だ。
b. 道徳性不安だって、不安は不安だ。

一般に、(27a)には[A]の適用は考えにくく、[D]のみの適用によって解釈されるのではないかと考えられる。また、(27b)は[C]のみの制約下での解釈しかあり得ないのではないと思う。

また、これは意味の重畳性や多義性とは異なる現象であるが、どの制約が適用されるかによって、反復語の指示する対象の解釈が異なる場合もある。(28)のaとbを比べてみてほしい。

- (28) a. 人は人、動物は動物だ。[人と動物は違う。]
b. 人だって、動物は動物だ。[人もやはり動物である。]

(28a)は、[B]の制約が適用され、「動物」が人間と同じレベルのカテゴリーを指示しており、文全体としては、人間と他の“動物”との相違点を強調・再認識するものとして解釈される、と考えられる。一方、(28b)は、[C]が適用され、「動物」が人間の上位レベルのカテゴリーを指示しており、人間の“動物”としての成員性を強調・再認識するものとして解釈される、ということができよう。

5. 日本語と英語の同語反復文の対照比較

本節では、前稿(I)および本稿で紹介した研究の中から、同語反復文の意味解釈について比較的詳細に論じている研究、すなわち、日本語に関する我々の研究(阿部, 1989a, 1989b; 佐山・阿部, 1988a, 1988b, 1991a, 1991b, 印刷中)と、英語に関するWierzbicka(1987)の研究((I)を参照されたい)とを比較してみることにする。

さらには、我々の言う“制約”の下で解釈されると考えられる代表的日本語同語反復文

とそれに対応する英語同語反復文とを比較してみる。また逆に、Wierzbicka(1987)によって挙げられている英語同語反復文の例とそれに対応する日本語同語反復文とを比べてみる。そうした比較を通じて、同語反復文の意味解釈における普遍性あるいは言語特異性について考察を進めてみたいと思う。

5.1. 日本語から英語へ

(29) ダイヤはダイヤである。

(29)は、我々が制約[A]の条件によく適合する例として挙げたものである(例文(10)を参照されたい)。Wierzbicka(1987)の論に従えば、この(29)の「ダイヤ」に対応する英語名詞「diamond」を反復語とする英語同語反復文の表現は、(30)のように複数存在することになる。

- (30) a. A diamond is a diamond.
b. Diamonds are diamonds.
c. The diamond is the diamond.
d. The diamonds are the diamonds.

身近にいる英文学を専門とする英語母語話者に、(30)のaからdまでを見せ、同語反復文として意味の伝わるものはどれかと尋ねたところ、彼は(30a)と(30b)が同語反復文として意味が伝わるとした。そして、その意味としては、(30a)が「ダイヤモンドにも、他の宝石(precious stones)と変わらない本質的な価値(intrinsic value)がある」というようなものになり、一方、(30b)は「ダイヤモンドには社会的な価値(social value)がある」といったものになるとした。この“社会的価値”とは何かとさらに質問したところ、それは金銭的価値のようなものだと言った。彼が(30a)に与えた意味は、Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)に相当すると言える。しかし、(30b)に与えた意味は、Wierzbickaの説明の中には見い出せない。この意味は、ちょうど日本語母語話者が(29)から引き出すであろう意味、すなわち我々の言う制約[A]から導き出される意味とよく似ている。それゆえ、このことは、実際には、英語母語話者も、(Wierzbickaは指摘していないが)我々の提案する制約[A]に似た類の知識を心内に有しており、それを(30b)に適用して解釈を進めている可能性を示唆している、と言えるかもしれない。

- (31) a. 太郎は太郎だ。
b. Taro is Taro.

(31a)は、我々が制約[B]の代表的な例として挙げたものである(例文(16)を見てほしい)。

この(31a)の反復語は固有名詞「太郎」であり、対応する英語同語反復文は(31b)となる。この英語同語反復文(31b)の意味は、たとえば「太郎は(別の人間との比較において)ユニークな存在である」のように解釈され(Wierzbicka, 1987), 明らかにWierzbickaの言う二番目の意味的不変体(の意味)が強く引き出される例といえる。こうした観察からすると、我々の言う制約[B]から導かれるであろう意味は、Wierzbicka(1987)の言う二番目の意味的不変体ときわめて類似したものであると言えそうである。

我々の提案した残りの二つの制約[C], [D]は、日本語に言語特異的(language-specific)な表現上の制約を条件として課しており、それらの制約下で解釈される日本語同語反復文に直接対応するような英語同語反復文は存在しない。ただ、制約[C]から導かれる意味「aだって実際にはAである」と、Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)「すべてのAは他のAと変わらない」は、ともに「A」の成員の“同一性”を強調・再確認するという点で似ている。Wierzbicka(1987)の言う一番目の意味的不変体(の意味)は、日本語の同語反復文の場合にもあてはまると言えそうである。日本語の場合には、さらに一歩進ませ、「A」の非典型的成員の“(Aの成員としての)同一性”を述べるために、特別な表現形式「aだって、AはAだ」を慣用表現として発達させたのであろう。

5.2. 英語から日本語へ

さて、今度は、逆に、Wierzbicka(1987)が、彼女の言う“下位構文”にあてはまる例として挙げている英語同語反復文を取りあげてみよう。そして、そのそれぞれに対応する日本語同語反復文と比較してみることにする。

- (32) a. War is war.
b. 戦争は戦争である(だ)。
- (33) a. Politics is politics.
b. 政治は政治である(だ)。
- (34) a. Business is business.
b. 仕事は仕事である(だ)。

英文(32a), (33a), (34a)は、Wierzbickaによって“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文に適合する例として挙げられていたものである。彼女の説明する、それらの文の意味は、概略、以下のようなものである。戦争(政治、仕事)は人に悪いことをもたらすものであるが、そのことは言うまでもないことであり、また、そのことを変えるこ

とはできない。それゆえ、そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない。

こうした意味は、それぞれの英文に対応する日本語同語反復文(32b), (33b), (34b)からも受け取ることができる。そのことから言えば、Wierzbicka(1987)の説明は、英語に対してばかりではなく、日本語にもあてはまり、普遍性の高いものと言えそうである。しかし、日本語の場合には、その意味は彼女の言うほど固定的に決まてはいず、文脈や状況次第でその伝達される意味の側面が変化する。例文(35)の2文を見てもらいたい。

- (35) a. 相手が親友だからと言っても、仕事は仕事だ。私情をはさむわけにはいかない。
b. 地主という職業も、仕事は仕事だ。十分に生計をたてることができる。

例文(35)からも分かるように、文脈次第で、「仕事」のどのような属性が強調されるかは変わり得る。つまり、Wierzbicka(1987)の主張する“radical semantics (すなわち、同語反復文の意味は状況・文脈などの言語外の知識には依存せず、言語内知識だけで定まるとする極端な主張)”は、少なくとも日本語の同語反復文については妥当ではない、ということである。実は、同様のことは、Wierzbicka(1987)への批判として、英語についても指摘されている(Fraser, 1988; Gibbs & McCarrell, 1990)。たとえば、前稿(I)でも触れたように、Gibbs and McCarrell(1990)は、(34a)が、その置かれた文脈・状況の違いにより、「仕事は競争である」というように仕事が否定的属性を有するものとして解釈されることもあれば、「仕事は金銭的な利得を与えるものである」というように肯定的属性をもつものとして受け取られることもあると述べている。また、このことから推測されるが、Wierzbickaの言う“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の下位構文は、我々の言う“価値評価”の制約[A]と強く関係するところがあると言えそうである。

- (36) a. Kids are kids.
b. Children are children.
c. 子供は子供である(だ)。

(37) a. Boys are(will be) boys.
b. 男の子は男の子である(だ)。
c. 少年は少年である(だ)。

- (38) a. Women are women.
 b. 女は女である(だ).
 c. 女性は女性である(だ).

英語同語反復文(36a), (36b), (37a), (38a)は, Wierzbicka(1987)が“人間の性質に対する寛容”の下位構文に適合する代表的な例として挙げているものである。彼女が説明しているそれらの意味は, 概略, 次のようなものである。子供(男の子[少年], 女[女性])は, まわりの人間がそうしてほしくないと思うことをしてしまうものであるが, そのことは言うまでもないことであり, また, 子供(男の子[少年], 女[女性])はその行動を変えられないものである。それゆえ, そのことを理解しなくてはならないし, そのことで何らかの悪いことを自らに感じさせるべきではない。

このような意味は, 確かに, 対応する日本語同語反復文(36c) ((3), (6)に同じ), (37b), (38b)からも受け取ることができる。特に, 日本語の慣用句とも言える(38b)の意味などは, まさにその通りであろう。しかし, やはり, この“人間の性質に対する寛容”の場合も, 上記の“複雑な人間の行為に対する真摯な態度”の場合と同様に, 日本語同語反復文の意味は, Wierzbickaの言うほど固定的にはならない。また, “価値評価”と強く関係し合っていると考えられる。(36c), (37b), (37c), (38b), (38c)など, それぞれの英文に対応する日本語同語反復文の場合には, その意味は, 文脈次第で, Wierzbickaの言う“寛容”とは異なり, “賞賛”となったりもする。たとえば, (36c)を(39)のように変えたとしてみよう。

- (39) やっぱり, 子供は子供だね。

この表現(39)は, 子供の“しょうがなさに対する寛容・諦観”を伝えるための発話としても容認できるし, また, 子供の“可愛らしさ”を伝えるための発話としても受け入れることができるであろう。

- (40) a. The law is the law.
 b. 法律は法律である(だ)。

- (41) a. A deal is a deal.
 b. 取引は取引である(だ)。

- (42) a. A promise is a promise.

b. 約束は約束である(だ)。

Wierzbicka(1987)は、“義務”の同語反復文として(40a), (41a), (42a)を挙げ、その意味を概略次のようなものだとしている。法律(取引, 約束)について実行すべきことがあるという事実を人は受け入れなければならない。ただし、ときどき実行したくないと思うことがあっても、そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない。

英文(40a), (41a), (42a)に対応する日本語同語反復文(40b), (41b), (42b)は、いずれも日本語母語話者によって比較的容易に受け入れられると思う。そして、その際受け取られる意味も、基本的にはWierzbickaが示唆する意味とほとんど同じではないかと思う。つまり、「法律」、「約束」などの概念から連想される“履行”や“遵守”といった意味合いが伝わる。

このことは、我々の提案する“制約”がまだ説明原理として不十分なものであることを示唆する。たとえば、日本語文(40b)から受け取り得る“履行”や“遵守”といった“義務”に関わる意味合いは、我々の提案する4種の制約のどれからも予言できない。(43)と比べてみよう。

(43) 確かに、ザル法はザル法だ。早急に改正すべきだね。

「ザル法」という反復語をもつこの同語反復文(43)の場合は、“履行”や“遵守”といった“義務”に関わる意味合いを伝える発話として解釈することはできない。この文の場合は、むしろ、我々の言う制約[A]から予測される、反復語の否定的価値評価を強調・再認識する発話として解釈される、と言ったほうがよいであろう。

また、(44), (45)を見てほしい。

(44) 慣習は慣習、法律は法律である。公務員の君としては、どちらかといえば、法律に従ったほうがよいであろう。

(45) 悪法でも、法は法だ。

(44), (45)の例における同語反復文からは、確かに、履行、遵守といった義務の関わる意味が伝わる。しかし、それぞれの文は、その前に、まず、我々の提案する制約[B]あるいは[C]の下での処理を受けると言える。すなわち、(44)の場合は、[B]の制約を受け、「法律」は「慣習」とは違うということを強調・再認識する発話として解釈され、また、(45)は、[C]の制約下で、「悪法」もやはり「法(律)」という集合の成員に違いないというこ

とを強調・再認識する発話として解釈される、と言えるのではないかと思う。

5.3. 同語反復文の文脈依存性

さて、こうして見てくると、日本語から英語へ、英語から日本語へと、反復語を相手言語の対応する単語に取り替えた同語反復文は、一般に相手言語の母語話者に受け入れられ、また、ほぼ同じような意味で解釈されることが多いと言えそうである。もちろん、そうは言えない部分もある。日本語にも英語にもそれぞれ言語特異的な表現形式があり、そのような表現形式に基づいて伝えられる意味については、両言語間に単純な対応を求めるのは無理である。たとえば、我々の言う制約[C]に関わる日本語文形式「aだって、AはAである」に直接対応する英語の文表現はない。また、英語には、冠詞の有無と種類、単数・複数の違いによって、反復語1語につき複数の同語反復文表現が存在し得るが、日本語ではそうではない。(46a) ((42a)に同じ) および(46b)を見てほしい。

- (46) a. A promise is a promise.
b. Promises are premises.

本研究の前半部(I)の第4節においても触れているが、Wierzbicka(1987)によれば、(46a)は彼女の言う“義務”の同語反復文に適合し「約束は守りたくなくても守らなければならない」のように解釈されるのに対し、(46b)は「約束は約束にすぎない。常にあてになるとは限らない」という別の意味をもつものとして解釈されるという。同じ反復語を用いながら、異なった文表現で異なった意味を伝えるということは、日本語の同語反復文では不可能である。英語同語反復文(46a)と(46b)に対応する日本語同語反復文(47) ((42b)に同じ)によって、(46a)と(46b)のそれぞれの文の意味を伝えるためには、この文表現だけでは足りず、それぞれの意味に導くために十分な文脈や状況の情報が必要になる。

- (47) 約束は約束である(だ)。

このような例から、次のような可能性が推測できる。一般的に言って、英語同語反復文の方が、日本語同語反復文よりも、反復語の単数・複数あるいは冠詞の種類と有無といった表現上の変化が多く(つまり意味を伝える道具だてが多く用意されており)、その分だけ文脈独立的に意味を伝えることができる可能性がある。逆に言うと、日本語の同語反復文の意味は、英語の同語反復文の場合よりも文脈依存のあるいは多義的になる、ということである。

6. 同語反復文の意味の普遍性

Wierzbicka(1987)の言う、同語反復文がもつ“意味的不変体”と“下位構文”を利用し同語反復文から引き出される意味、および、我々の提案する“制約”から導き出される意味、の間には多くの共通点があるように見受けられる。また、さらには、その他の研究者の指摘する同語反復文の意味も考慮に入れて広く考えてみると、以下のような仮説がたえられるのではないかと思う。

同語反復文は、英語や日本語といった個別言語の如何にかかわらず、次のような三つの意味を伝える表現として普遍的に用いられている。その第一は、「すべてのAは他のAと違わない」という、カテゴリーの成員の“同一性”の意味、第二は、「Aは他(B)とは違う」という、他のカテゴリーからの“独自性”の意味、そして、第三は、カテゴリーAのもつ最も顕著で不変な特徴によってもたらされる意味、である。この最後の第三の意味には、具体的には、我々の言う“価値の評価”，Wierzbickaの言う“義務の履行・遵守”，“人間の性質に対する寛容”，などがあり得る。また、この意味は、Gibbs and McCarrell(1990)の言う“ステレオタイプ”に相当する。

さて、表現形式という点から見れば、同語反復文は、主語、述語の異なる名詞述語文（「AはBである」あるいは「(ART)A be (ART)B」）の特別な場合に相当する。一般に、人は名詞述語文を主語の指示するカテゴリーが述語の指示するカテゴリーの成員であるというようなクラス包含関係として解釈したり、あるいは主語の指示するカテゴリーと述語のカテゴリーとが同一対象を指示するといった同一関係を示すものとして解釈したりする(佐山・阿部, 1990a, 1990b)。それゆえ、名詞述語文の特別な場合である同語反復文に対しても、これと類似した集合関係を表すものとして解釈すると考えるのは自然であろう。前稿(I)の第4節で触れた通り、Glucksberg and Keysar(1990)やGibbs and McCarrell(1991)は、同語反復文はまさに一般の名詞述語文と同じクラス包含関係を示すものとして解釈されると主張する。

しかし、もちろん、反復語Aしかもたない同語反復文は、A, B, 二つのカテゴリーの間の集合関係について何かを伝えることはできない。名詞述語文形式をもつ同語反復文は、必然的に、反復語Aによって指示される概念Aのカテゴリー（あるいは集合）としての“何か”を伝える以外にはその役割はないことになる。その“何か”が、上述した三つの意味といえるのではないかと思う。

よく知られているとおり、自然カテゴリー概念は、“族類似(family resemblance)”構造を有しており、そのすべての成員が特定の定義的特徴をもっているわけではない(Rosch, 1973; Rosch & Mervis, 1975)。つまり、自然カテゴリーは、明確な定義的特徴をもたずその境界が曖昧である。また、自然カテゴリー概念は、その使われ方が時とともに変わる

こともよくある。つまり、それを構成する重要な特徴が徐々に変化したり、その境界が変わったりもする。それがために、時として、言語使用者には、あるカテゴリーの周辺的な成員が当該カテゴリーの成員であること、すなわち、ある成員のAとしての“同一性”，を強調・再認識する必要が生じてくることにもなる。日本語ではそれを(48) ((19), (21a)に同じ) のような同語反復文を用いて伝えるのではないかと思う。

(48) ペンギンだって、鳥は鳥だ。

また、ある場合には、自然カテゴリー概念の境界や成員がはっきりとしないために、そのカテゴリーに近接し、重なり合っている他のカテゴリーと違うこと、すなわち、そのカテゴリーの“独自性”，を強調・再認識することが必要にもなってくる。そのために、(49) ((18c)と同じ) のような同語反復文が存在することにもなる。

(49) 心理言語学は心理言語学，言語心理学は言語心理学だ。同じように見えて、両者はその成り立ちからして違う。

さらに、他のカテゴリーとは異なるという意味の“独自性”を伝えるにとどまらず、そのカテゴリーの独自性を支える顕著な特徴（あるいは属性）を強調・再認識することを伝えるために同語反復文が用いられる。たとえば、(50) ((3), (6), (36c)に同じ)，(51) ((4), (34a)と同じ)，(52) ((11)に同じ)，(53) ((30a)と同じ) のような例である。

(50) しょせん、子供は子供だ。

(51) Business is business.

(52) 腐っても、鯛は鯛だ。

(53) A diamond is a diamond.

あるカテゴリー概念の特徴を強く効果的に伝える道具だとして、同語反復文は、英語においても、日本語においても、そしておそらくはそれ以外の言語においても、用いられている。そして、その際、その特徴（あるいはそれがもつ顕著な属性）を伝える話者の価値評価は、どちらかと言えば、肯定的というよりも、否定的な場合が多い。それは、我々が指摘する日本語の場合ばかりではなく、英語の場合にもあてはまるようである(Gibbs &

McCarrell, 1990).

7. おわりに

前稿(Ⅰ)および本稿(Ⅱ)を通じ、英語、日本語それぞれの同語反復文の意味解釈のあり方を、それらの比較をまじえながら考察してきた。双方の意味解釈に対する研究者間の立場の相違は、根本的には、解釈時に必要とされる知識のうちどの程度を言語知識の範囲内から引き出し、どの程度を文脈・状況知識から引き出すと考えるかにある。本研究は、英語および日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究の中に、反復語の語彙情報や統語情報のみを言語知識から引き出し、それ以外は文脈・状況知識から引き出して解釈すると考える立場(Glucksberg & Keysar, 1990; 毛利, 1980, など)から、言語知識を参照すれば同語反復文はほぼ解釈できるとする立場(Wierzbicka, 1987)まで、さまざまな見解が存在することを示した。また、英語および日本語の同語反復文について、それぞれの母語話者のもつどのような知識が、双方の意味解釈を支えているのかについて考察した。認知心理学者としての我々の関心は、同語反復文の意味解釈の際に必要なとされる知識源や知識を同定したり詳述したりすることにとどまるわけではもちろんない。我々の興味は、人が同語反復文を解釈する、そのメカニズムの具体的な解明にある。これを成し遂げるためには、なお一層の理論的考察とそこから生じてきた仮説の実験的吟味という、長い研究の連鎖が必要となるであろう。ともあれ、同語反復文の研究は、この表現形式が、“文字通りの意味”を超えた意味の理解を要求する発話の中でも、最も単純な表現形式をもつ一つと言えるだけに、修辞理解過程の解明というより大きな問題への突破口を開くことが期待されているわけである。

引用文献

- Abe, J. (1982). Schema representation of the "speaker-world" in natural language processing. In R. Trappl (Ed.), Cybernetics and systems research (pp. 885-890). Amsterdam: North-Holland.
- 阿部純一 (1989a). "心理学は科学だ", "心理学はうなぎだ", "心理学は心理学だ": 修辞理解過程についての認知心理学的考察. 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, L23.
- 阿部純一 (1989b). 修辞を理解する過程. ディスコースプロセス研究, 1, 85-92.
- Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), Questions and politeness: Strategies in social interaction (pp. 56-310). Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1985). Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language. Cambridge, MA: MIT Press. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博(訳). メンタル・スペース: 自然言語理解の認知インターフェイス. 白水社.)
- Fraser, B. (1988). Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies. Journal of Pragmatics, 12, 215-220.
- Gibbs, R. W., & McCarrell, N. S. (1990). Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding colloquial tautologies. Journal of Psycholinguistic Research, 19, 125-145.
- Glucksberg, S., & Keysar, B. (1991). Understanding Metaphorical Comparisons: Beyond Similarity. Psychological Review, 97, 3-18.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol.3, Speech acts (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- Grice, H. P. (1978). Some further notes on logic and conversation. In P. Cole, & J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol.9, Pragmatics (pp. 113-128). New York: Academic Press.
- Johnson-Laird, P. N. (1983). Mental models. Cambridge, MA: Harvard University Press. (海保博之(監修). AIUEO (訳). メンタル・モデル: 言語・推論・意識の認知科学. 産業図書.)
- 金子康朗・佐山公一・阿部純一 (1986). 修辞表現理解過程における"逸脱"の検出. Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement, No.45.
- 小泉保 (1990). 言外の言語学: 日本語語用論. 三省堂.

- 国広哲弥 (1985). 慣用句論. 日本語学, 4, 4-14.
- Levinson, S. (1983). Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press.
- 毛利可信 (1980). 英語の語用論. 大修館書店.
- 大野晋 (1978). 日本語の文法を考える. (岩波新書53). 岩波書店.
- Rosch, E. (1973). On the internal structure of perceptual and semantic categories. In T. E. Moore (Ed.), Cognitive development and the acquisition of language(pp. 111-144). New York: Academic Press.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Study of Categories. Cognitive Psychology, 7, 573-605.
- Searle, J. (1979). Metaphor. In A. Ortony(Ed.), Metaphor and thought(pp. 92-123). Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐山公一・阿部純一 (1988a). 修辞理解の認知過程: 同語反復文の場合(隠喩文との比較). 日本認知科学会第5回大会発表論文集, 72-73.
- 佐山公一・阿部純一 (1988b). 同語反復文の理解過程. 日本心理学会第52回大会発表論文集, 783.
- 佐山公一・阿部純一 (1991a). 同語反復文と隠喩文の意味解釈過程を支える概念知識構造の提案: 典型性と顕著性の概念ネットワーク上での表現. 日本認知科学会第8回大会発表論文集, 72-73.
- 佐山公一・阿部純一 (1991b). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅲ): “典型性” の概念ネットワーク上での表現. 日本心理学会第55回大会発表論文集, 380.
- 佐山公一・阿部純一 (印刷中). 日本語同語反復文の意味解釈: 反復語および文脈の関わり. 心理学研究.
- Wierzbicka, A. (1987). Boys will be boys: ‘Radical semantics’ vs. ‘Radical pragmatics’. Language, 63, 95-114.